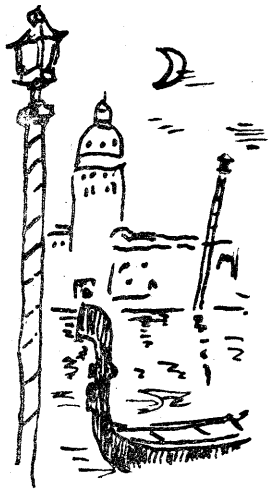
幼児への
クリスマス伝説民話



上沢謙二

クリスマス童話については、毎年方々で語られる。しかし伝説は割合になおざりにされている。それでここでは、幼児向のそれについて書くことにした。

鈴蘭の花

（パレスチナの伝説）

或る時、子供のイエスさまがお友だちとあそんでいました。みんな疲れて、のどがかわきました。イエスさまは井戸へ走っていって、お椀へいっぱい水を汲みました。けれども、自分で飲む前に、お友だちのところへもってきました。するとひとりのずるいお友だちは、何もいわないでいきなりお椀を取りあげると、どんどん飲んでイエスさまに渡しました。水はお椀の底の方にすこし残っていましたが、イエスさまは受取ると、こごみました。そこには、足もとに、のどがかわいて弱った草が、しおれて生えていました。イエスさまがお椀をさかさにすると、水はたらたらと、草の上へおちました。すると、草は生きかえったように顔をあげましたが、その根もとから、ちょろちょろと、つめたい水が湧きだしたのです。そうして流れだしましたが、流れていくその両側には、小さい白い花がずうっと咲きだしたのです。鈴蘭の花――その花は、こういう美しい名で呼ばれるようになりました。

子供のキリスト

（ドイツの伝説）

或る寒い夜。ふたりの子供が家の中で火にあたっていました。すると、ことことと、かすかに戸をたたく音がしたのであけてみると、ぼろぼろの服を着て、帽子もかぶらない、靴もはかない子供が立っていましたがふるえ声でいいました「私中へ入ってあたってもいいですか」ふたりは親切な子供でしたから「いいですとも、おはいりなさい」といいました。「ありがとうございます」見知らぬ子供は入ってきました。ふたりの子供は自分

たちのパンをその子供に分けてやって自分たちの寝床へ寝かしてやりました。

真夜中になって、ふたりの子供はふと目をさましました。すると、何ともいえない美しい音楽がきこえてきたのです。音のする外の方を見ると、おどろきました。白い光る衣をきた子供の天の使たちが大勢、金の竪琴をひきながら、こちらへやってくるではありませんか。と――急にパッと部屋じゅうが明るくなりました。びっくりしてふりむくと、そこには見知らぬ子供はいないで、その代り、そとの子供たちよりももっと光りかがやく衣をきたひとりの子供が立っていたのです。そとの子供たちはぐるりと家を囲んで、金の竪琴を鳴らしつづけましたが、それはなつかしいクリスマスの音楽でした。立っていて子供はいよいよ光りだして、まぶしくて見ていられないようになりましたが、声がひびいてきました。

「私は寒くてふるえていた。それを家の中へ入れてくれた。私はのどが渇いておなかがすいていた。それを飲ませてたべさせてくれた。私は疲れて弱っていた。それをやわらかい寝床へ寝かしてくれた。私は、親切な子供たちを仕合せにしょとしてやってきた子供のキリストである。お前たちは、私にそんなに親切にしたから、この木は、毎年よい物をつけるだろう」そうして手にもっていた木の枝を入口のところの土へさしました。「あっもし」ふたりの子供は呼びとめましたがもうその姿は見えませんでした。気がつくと、そとの大勢の子供たちも、いつの間にかいなくなって、表はまっくらくしずかになっていました。そうして入口には、丸い金の実をたくさんつけた樅の木が生えていたのです。それから毎年、クリスマスになると、その樅の木には、美しい丸い金の実がたくさんなって、きらきらと光りました。

ババウスカおばあさん

（ロシアの伝説）

それは、キリストがお生まれになった夜のことでありました。ベツレヘムからは遠いところの一軒の小さい家の中にバブウスカというおばあさんが、火にあたっていました。表は雪がどんどんふっていました。と――戸をたたく音がするので、立ちあがってあけると、おばあさんがさし出す蠟燭の火に照らされて、三人のおじいさんが立っていました。三人は「今晩は」といいました「私たちは遠くから旅をしてきましたが、今晩、ベツレヘムというところで神様の赤ちゃんがお生まれになったことをお知らせしようとして寄ったのです。私たちはその赤ちゃんに贈物をもってきたのですが、あなたもいっしょにいきませんか」おばあさんは「折角ですが、もう夜更けですし、たいへんな雪ですから」といって戸をしめてしまいした。そうしてまた火にあたりましたが、おばあさんはひとりぼっちなので、子供がすきでした。それでさっきおじいさん達がいった「神様の赤ちゃん」という言葉を思いだしたのです。「神様の赤ちゃんといえば、偉い赤ちゃんにちがいない。あしたになったら、その赤ちゃんのところへ、おもちゃをもっていってあげよう」ひとりごとをいいましたが、やがて床へはいりました。朝になる

と、バブウスカおばあさんは長い上着をきて、たくさんおもちゃを入れた袋をもって、杖をついて出かけました。ところが困りました。ゆうべ、おじいさんたちに、ベツレヘムへいく道を聞いておかなかったのです。それでおじいさんたちはどっちへいったかわかりませんが、もうよほど遠くへいったでしょう。「いそいでゆかなくては——大いそぎ大いそぎ」。おばあさんはとっとっとあるきだしました。村を通って、町を過ぎて、森を越えて、とっとっと。そうして人に遇うと聞きました「神様の赤ちゃんはどこにいらっしゃるでしょう」。けれども、知っているものはありません。しかし聞かれた人はいいました「もっといきなさい、もっと」。そうするとおばあさんいそいでゆかなくては——大いそぎ大いそぎ」といって、あるいていきました。こうしておばあさんは今でもまだ「神様の赤ちゃん」をさがしてあるいています。そうしてクリスマスの前の晩になると、方々の家へやってきて、しずかに杖で戸をたたいころへきていると、眠っている子供のとて、中へは小さな声でたずねます「神様の赤ちゃんはここにいますか」。しかしそこにはいないので、いそいで出ていきますが、その前に、袋の中からおもちゃを出して、子供の枕もとへそっと置きます。「神様のお子様のために」といいながら。クリスマスの前、目をさますと、枕もとにある贈物は、このバブウスカおばあさんがくれるのです。

☆　☆　☆

伝説の特徴は、一定の時代と、場処と主人公をもつことである。一地方の史的事実に関係しているが、それに作りばなしが加わっている。しかし作りばなしの部分も、嘗ては事実と信ぜられたものである。松村武雄博士は「半歴史的半空想的」といった。その意義としては、愛郷心の所産であること、民族的誇りをあらわすこと、価値ある行為の模範を示すこと、過去の時代に対する知識を提供することなどが挙げられる。

「真実」といえば、普通「事実」即ち客観的にあらわれるものを指す。しかし客観的にあらわれないものも存在する。心の中に活動する思いや、感情や、要求がそれである。これは、屢々あらわれるもの以上の影響力感化力を発揮する。例えばウイリアム・テルがわが子の頭上の林檎を射おとして、代官ゲズレルの横暴を挫いたという有名な話は事実でないといわれる。しかしその話は東西にひろがって、大きな感化を及ぼした。それは客観的事実でないにしても「そうあれかし」「そうあり得る」「そうあるべきだ」という思いが、人々の心の中にあった。これを「主観的事実」といってよかろう。その事実が形を採って客観的にあらわされたのが伝説である。だから、伝説は「見える事実以上の見えない事実を客観化したもの」ということができよう。この意味において「深い真実」ということもできよう。

それから伝説の特徴は、民衆の所産だということである。それはお布令や、指示や、勤告のような天降りで出来上がったものではない。自然的に生まれ、自発的に育ち、自動的にひろがっていったも

のである。それは往時の民衆の思想、信仰希望、理想、不満、抵抗の活潑な切実な表現に外ならないのである。

だから、その表現は素朴であり、卒直であり、簡明である。ところで、子供の心理は素朴であり、卒直であり、簡明である。文化の或る段階における大人の心理と、現代の児童のそれと共通するものがあることは、進化説、社会学、心理学などでいわれるところで、これが、伝説が子供に訴える所以であると考えられる。

クリスマスは信仰の絶対的な対象であるイエス・キリストの降誕という大事件である。そこに驚異、尊崇、希望、理想が仂きだすのは当然である。それがおのずから形を取ってあらわされるのも当然である。その影響力感化力が極度に発揮されるのも当然である。それで、聖い、美しい、意義深い、さまざまな伝説が生まれたのである。そうして今日の子供の心に強く訴えているのである。

クリスマス伝説に含まれた精神は、きわめて庶民的なものである。キリストはあわれな子供となって、いぶせき家々を見舞うのである。貧しい者は貧しいが祝福を受けるのである。生まれたばかりのキリストは早くも厄難に襲われて、沙漠の旅にのぼるのである。そこにあらわれるものは、子供と、庶民と、貧乏と、苦しみである。その祝福と浄化である。

民衆から生まれて、下からもりあがったクリスマス精神は、大凡今日のクリスマス——御馳走と、パーテーと、大売出しと、ダンスとは、似ても似つかぬものである。まったくその正反対なのである。

現代の進歩的史学者の一人である松本新八郎氏は、嘗て「民話は生きている」という題下に、こういうような意味のことを述べた。

民話は一定の郷土色と共に、民族的国際的につながる共通のものをもつ。民話にそれぞれの育った郷土があって独自性を有するが、その中に含まれるテーマは時代時代に創られてきたので、同じような条件のところには、同じ系統の話が発見される。そこで、民話は共通の文化世界に仂きかけて、その創造に寄与するいろいろのすぐれた特徴をもっている。ところが、日本の民俗学者は、それを「亡びゆくもの」として取扱い、尊ら保存することを仕事にしている。そうしてカード箱の中に押込めてしまった。しかし我々はそれを社会に取り出さねばならぬ。そうして民話を発展的に承継して、現代に将来に活かすことを考えなければならない。

クリスマス伝説を幼児に与える幼児教育者としては、特にクリスマスのこの際改めてそれを見直して、再考三思すべき必要があると思うのである。

〔附記〕拙著『世界クリスマス伝説集』（東京中央出版社発行）十四篇国に亘る三十六編を収む。